

## 目次

1. きっかけは猫おばあちゃんだった  
——何も知らないところからの出発  
5
2. 神奈川県動物愛護協会へ  
——撮影スタート  
20
3. 殺処分に向きあう  
——千葉・神戸の行政施設で  
45
4. しろえもんのしつけ  
66
5. 四〇〇匹の「犬捨て山」で  
——山梨、ボランティアたちの取り組み  
74
6. 現代ペット事情  
91
7. 稲葉さんのこと  
98
8. 崖っぷち犬騒動と子どもたち  
——徳島、ふたつの風景  
102



7.

捨て猫と人間と

——東京・多摩川、小西夫妻

121

しろえもんのしつけ 2

137

8.

獣医師・前川博司さんに聞く

——戦中戦後の日本人とペット

147

9.

イギリスのいまを取材する

——動物愛護の先進国へ

159

10.

最後の撮影

——映画の完成へ向けて

184

11.

ドキュメンタリーを作るきっかけ

——ぼく自身のことを少し

195

12.

エピローグ 犬と猫と人間の、それから

209

あとがき

220



# 1.

きっかけは猫おばあちゃんだった

——何も知らないところからの出発



•ある日、劇場のロビーで

「動物たちの命の大切さを伝える映画を作ってほしいの。お金は出します」

劇場ロビーのベンチで、見知らぬおばあさんに、いきなりそう切りだされた。

めんくらったぼくは「ハア？」と口走りそうになりながら、一応は話を聞くことにした。

二〇〇四年四月、この日はぼくの前作、映画『あしがらさん』の上映があり、舞台挨拶のた

め映画館を訪れていた。

おばあさんの話を要約すると、「昔から猫好きで、自宅でめんどうをみたり、野良猫に餌えさをあげたり、何匹も世話してきた。しかし、自分ももう年で、先も長くない。自由になる多少のお金があるから、それを猫や犬のために使いたい。それで映画製作を思いついた」という。

まったくの個人でドキュメンタリー映画の製作を依頼してくるとは、聞いたこともない。まして、相手はけっこうなお年だ。悪いが、ほくは半信半疑だった。おばあちゃんのためにも、「もし動物のためにお金を使いたいというなら、映画製作よりも動物愛護の団体とかに寄付するほうが、確実に有効じゃないですか？」と伝えた。

おばあさんの答えは、「あたしも以前はかかわっていた団体もあつたけれど、信用できないところもあるから」。そんな返事だった。

しかし、初めて会ったほくは信用できるのか？

そもそも動物のことなんて、これまで関心もなかった。そんなほくに何を撮れというのだ。おばあさんの思いはわかるが、とまどいのほうが大きかった。しかも、「あたくしは、映画は素人ですから、具体的な内容はいっさいおまかせします」とも言う。

うーん、こんな話ってホントにあるのか？

まるでキツネにつままれたような気分だった。動物の話だけに。

もう夜もふけていた。とにかく、「またあらためてお話をうかがいます」と言って、連絡先を交換し、その日は別れた。

それからしばらくして、猫おばあちゃんからビール券が届いた。電話でお礼を伝えねばと思いつつ、まごまごしていたら、向こうから電話があった。

「あの、もう一度お会いできますか？」

どうも猫おばあちゃんは本気のような。しかたない、会うしかない。

再会のまえの晩、ふと思った。

もし、万が一、こんな出会いで映画を作ることになったら、明日の話し合いが映画の重要なシーンになるのではないか。

そこで、フリーランスの映像仲間である、土屋トカチに電話で相談した。

「こんな話があって、明日また猫おばあちゃんに会うんだけど、カメラをまわしてくれない？ ギャラのかわりにビール券あげるから」

## ●捨てられる子猫たち

年に何回か、施設のまえに犬や猫が捨てられることがある。なかでも多いのは、生まれたての子猫だ。犬や猫を捨てるのは犯罪だ。スタッフも、捨てた人に対しては怒りがこみあげる。目のまえにいる以上、ほっとくわけにもいかない。愛護協会で育てることになる。

生まれたばかりの子猫は、だいたい三時間おきにミルクを飲む。うんちやおしっこは、お尻を刺激しないと出てこない。離乳食も最初はスプーンで食べさせることになるし、お腹もこわしやすい。夜間は施設が無になるので、子猫はスタッフが自宅に連れ帰って世話をする。その間、まず一か月は寝不足の日々が続く。人間の赤ちゃんと同じように、子猫はとても手間がかかるのだ。

そうやって懸命に世話をしているも、途中で死んでしまうこともある。

だから所長の増田美樹子さんは、いつも一番弱そうな子を連れて帰る。若いスタッフには、あまりつらい思いをさせたくないと思うからだ。

そんな増田さんの力になってくれるのが、自宅で飼っている猫の「いいちゃん」。名前の由来は「いい奴だから」。



保護した子猫たちの様子を見る神奈川県動物愛護協会のスタッフ。  
それぞれ、どの猫の世話を担当するか選んでいる。



子猫がうんちを出せるように、  
ティッシュでお尻を刺激してやる。

おそらくは、異論がある人もいるだろう。しかし、欧米では、病気で苦しんでいて助かる見込みのないペットは、自分の腕のなかで安楽死させてやるのが飼い主の責任、といった考え方がむしろ常識と聞く。現在の私たちは動物とのつきあい方も西洋化しているわけで、責任をもって動物を世話するとは、そうした心構えも必要とされることなのかもしれない。

● 神戸の大震災をきっかけに

神戸における行政と民間団体の連携は、一九九五年の阪神・淡路大震災での救護活動が始まりだった。

この地震で被災した犬は四三〇〇匹、猫は五〇〇〇匹と推計される（兵庫県保健環境部調べ）。多くの動物たちが飼い主を失ったり、飼い主とはぐれたりして路頭に迷った。

日本動物福祉協会阪神支部の副支部長だった松田さんは、兵庫県南部地震動物救援本部の副本部長を務めた。そして、兵庫県・神戸市の獣医師会とともに、行政と連携して動物の保護と譲渡を進めた。

しかし、街の復興とともに、その協力関係もいったんは途絶える。

その後、動物管理センターの状況を改善させようと、松田さんたちは何度も施設に足を運ん



子犬に薬を塗るCCクロの松田早苗さん（左）。

だ。最初はセンターの子犬譲渡会に行っても、施設内にすら入れてもらえず、遠巻きに観察するしかなかったという。

そこから施設の改善を要望しつつづつて、ようやく現在の環境にまでたどり着いたそうだ。

松田さんは言う。

「ほんとうに、神戸市もよくがんばった。私は文句をたくさん言うけどね。行政は（文句を）言わないと変わらないから。きれいごとと言ってもだめ。でも、ほんとうによくがんばったことは、がんばった。ただたんに、行政が悪いって言うって済まさないで、じゃあ、私たちにはどれだけできるのかっていうことを実践することが必要です」

松田さんはこんな話をしながらも、掃除の手を休めない。とにかく口だけではなく、みずか

らも体を動かしてきたのだ。松田さんの姿勢を表す、こんな言葉が印象に残った。

「あきらめるけど、あきらめない」

「五年後には、この子（処分される犬）に準じた犬を救うことができるようにする」

●公務員として、処分を担う立場として

今回の取材では、実際に処分を担うセンター職員からも本音が聞きたかった。

しかし、センター内の取材が許可されているといっても、職員一人ひとりにこちらの相手を  
する義務はない。正直、なかなかインタビューを頼みづらい雰囲気だった。なんとか職員との  
距離を縮めたくて、昼休みに世間話をしたりしながら、取材四日目によくカメラのまえ  
で、四人の職員に話を聞かせてもらうことができた。

取材に慣れていない三人の職員は少々緊張気味だったが、それぞれの人柄が伝わってくる印  
象だった。なかでも二〇代の若手職員は、優しい好青年という雰囲気で、カメラのまえで率直  
な心境を語ってくれた。彼とのやりとりを採録する。

——犬や猫は嫌いなほうじゃない？

「ものすごい好きです。もともと神戸市に採用されたときに、動物園に行きたいなと思ってたんで。かたちは違いますけど、動物に接せられるということで。昔から犬猫は好きでした」

——好きな人ほどつらいでしょうね？

「そうですね、最初はつらいというのはありました。少しずつ慣れてきて、なんとかこなせるようになった。水替えたりするときに、（この犬が）明日処分だと思つたりつらいですよ。でも、逆に言うと好きだから、（この仕事が）できるのかなつて思つたりもしたんですけど」

——辞めようと思つたことは？

「正直、あります……。でも、精神面で先輩方にはずいぶん支えてもらいました」

——うれしいことは？

「やっぱり、自分が世話していたワンちゃんが譲渡会でもらわれていたり、元気でやっていると聞くとうれしい」

好きだからできる、という言葉は、獣医である職員の玉寄たまよ一彦さんの口からも出た。

「最後まで、動物を好きなヤツがみてやつたらいいじゃないか」

このセンターに配属になったとき、そんな思いで着任したという。

「動物嫌いな人が処分するのと、好きな人が処分するのでは扱いも違ってくると思う。われわ

ホッとしたら思わず、「もしこの瞬間が撮れたらどうだったか」と想像してしまった。間違いなく迫力ある場面になっただろう。そう思うと、撮れなかったことが悔しくなってくる。だが、さすがに「もう一回やってもらってもいいですか」と言う気にはなれなかった。

### ●ペットは店で売っていない

ドッグトラストに犬を探しにきていた老夫婦から、昔の様子を聞かせてもらった。

「私たちが子どものころは、露天の市場で、犬や猫、小動物を売っていました。私も、最初に飼った犬はそこで買いました。当時、こういう施設はあまりなかったです。でも、もう六〇年もまえの話だからね」

現在、イギリスでは、ペットショップを許認可制にし、露店でのペット販売は禁止されている。ぼくが訪れたペットショップでも、店頭で売っているのは、鳥やハムスターなどの小動物のみ。犬や猫の販売には厳しい規制があり、店頭販売はほとんどおこなわれていない。こうして、犬や猫が安易に飼われることを防いでいるのだ。

犬を飼いたい人は、ドッグトラストのような保護施設からもらいうけるか、ブリーダーから直接購入するのが一般的だ。保護施設から動物をもらうには、当然、飼い主になるための面接

や家庭環境の確認もある。

こうした仕組みが成り立つには、一般の人びとの理解も必要だ。ドッグトラストへ家族と来ていた一〇歳前後の男の子に、ここで犬を選ぶ理由を聞いてみた。

「捨てられた犬はつらい目にあつてきた。だから幸せにしてあげたいんだ」

小学生でもこんな考えをもっているのが、動物愛護の先進国といわれるゆえんだらう。

取材の合間に、いくつかの公園で、犬の散歩をしている飼い主にもインタビューを試みた。こうした場でこそ、より一般の人の意識がわかるはずだ。

驚いたのは、ぼくが声をかけた飼い主さんたちのじつに半数近くが、犬をシエルターからもらいうけたという人だったことだ。これは想像以上の割合だった。シエルターから動物をもらうことが、それくらい一般的になつてきているのだ。また、ブリーダーから購入したという人でも、「自分の希望に合う犬がいれば、つぎはシエルターから引きとりたい」と語る人が多かった。

#### ● 市民が動物愛護活動を支える社会

英国ではどのようなにして、動物愛護・動物福祉が進んでいったのだろうか。

歴史を調べると、産業革命期の一八二二年に、世界で初めて、英国で家畜への虐待を防止する法律が制定されていた。そこから現在に至るまで、動物の扱いに関する多数の法律が制定されている。

そして、その最初の法律制定の二年後、一八二四年、王立動物虐待防止協会（RSPCA: Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）が誕生した。

RSPCAは国内に一九五の支部をもち、動物の保護・治療・譲渡、市民への啓発をおこなうほかに、専門の訓練を受けた三〇〇名以上のインスペクター（捜査官）がいて、動物虐待の調査をおこなっている。虐待の通報がよせられれば、インスペクターが警察官とともに現場へ出動し、改善指導をおこない、場合によっては虐待者を告発することもある。

公園でインタビューをした人のなかに、見るからに裕福そうな女性がいたのだが、毎年、複数の動物保護団体に寄付していると話していた。英国では犬や猫の保護をおもに民間団体が担っているわけだが、その財源は基本的に寄付金だ。大きな団体に集まる資金は、日本とは桁違（けた）いだ。

実際に比べてみよう。映画のおもな取材先である神奈川県動物愛護協会の年間予算は五〇〇〇〇〇六〇〇万円程度だが、後述する「パタシー・ドッグズ&キャッツホーム」は年間九億円

以上。RSPCA（王立動物虐待防止協会）にいたっては、年間予算が百数十億円といわれる。寄付でこれほどの予算をまかなえる背景には、寄付金に対する税の減免措置があることも大きいようだ。また文化的に、上流階級や富裕層には、寄付を通じて社会に貢献するという意識が根づいている。

取材してみて実感したのだが、英国の団体は豊富な資金によって、飼い主募集や活動のPRなどの広報活動を積極的におこなっている。それにより知名度が高まり、また資金が集まるのだ。そしてさらに積極的なPRができる、といった循環ができています。

これは保護や譲渡の点でも同様だろう。豊富な資金があるから、飼育環境を充実させられる。施設でのしつけや譲渡後のアフターケアも充実させられる。その結果、評判が高まり、もらい手が増える。そしてまた、新たな動物を保護することもできる。

ドッグトラストによれば、二〇〇六年にイギリスで処分された犬は七七四三匹だそうだ。同年、日本では一一万七九六九匹が処分された。じつに、日本の一五分の一の数だ。ちなみに、犬の総数は日本のおよそ半分だ。きわめて少ない処分数が実現されている。

思わずぼくは、「日本の犬に生まれたくない」と言った、マルコ・ブルーノさんの言葉を思い出していた。